

宮沢賢治テキストにおける批判の様相

黄, 英
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16020>

出版情報 : Comparatio. 6, pp.21-31, 2002-05-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

宮沢賢治テキストにおける批判の様相

黄 英

宮沢賢治テキストにおいてある種のユートピアを追求する志向が表現される一方、現実へ向かう批判の視線もしばしば見られる。この相反する二つの要素が時には分離し、時には交差し、宮沢賢治テキストの複雑な様相を見せた。しかし、「ユートピア的夢想と他の夢想とを区別するものは、現状に対する批判、風刺の衝動であり、それがあつた場合には積極的な反対物の提示となり、ある場合には現実のあべこべのイメージとなる」¹、と川端香男里が主張したように、ユートピアを追求することと現実を批判することとは基本的には一つの問題の表と裏の両面だと考えられる。

宮沢賢治テキストに見られる相反する二つの指向も一つの有機体の両面であると言えよう。したがって、ユートピアのアスペクトを究明するには、その反対側の現実批判の様相を明らかにする必要がある。本論は、この必要性に応じ、いくつかのテキストを取り上げ、そこに現れた批判の具体的なベクトルや方法を考察する。

宮沢賢治テキスト²の中では、狐と人間とが共演するドラマが描かれたものがいくつかある。その背景に〈狐が人を騙す〉という考え方が存在するのが多い。次に取り上げた「とっこべとら子」、「雪渡り」、「茨海小学校」は、三篇ともこのモチーフを共有している。そこに〈狐が人を騙す〉という考え方をめぐって、どんな展開が繰り広げられ、どんな批判の様相を呈しているのかを検討してみたい。

1、既成概念への懐疑視線——「とっこべとら子」の語り手

まず、「とっこべとら子」から見てみよう。このテキストは生前未発表で、現存草稿の執筆時期は大正10(1921)年あるいは大正11(1922)年と推測されている³。昔話と現在の騒ぎ話と二つの部分から構成されている。梗概を記しておこう。

まずとっこべとら子に関する昔話が紹介される。金貸業の六平じいさんが酔って帰宅する途中、侍に呼び止められ、十個の千両箱を預けられる。欲深の六平じいさんが、大変苦勞して重い千両箱を自宅へ運んだあげく、それが砂利俵だったことに気づく。それで熱病になり、とっこべとら子にだまされた、と言いつつ。これに対して、現代の話として、平右衛門の村会議員当選祝いが果てた時、疫病除けの源の大将をとら子だといって騒いだ事件が紹介される。

筆者が目撃したいのはテキストに登場した語り手の態度である。この語り手はただ物語を再現するのではなく、自分の意見も明白に示している。昔話が語られ終わると、「みなさん。こんな話は一体ほんたうでせうか」とその信憑性を疑い、さらに「どうせ昔のことですから誰もよくわかりませんが多分偽ではないでせうか」と話の真実性を完全に否定したのである。また、自分の判断を裏づけるために、近頃起きたとっこべとら子に関する事件を紹介した。しかも、それはただの酔っ払いの空騒ぎだと、真実ではないことが前提とされている。

このように、昔話の〈人間が狐にだまされる〉という人間中心の視点をひっくり返し、それは人間

¹ 川端香男里『ユートピアの幻想』(講談社 1993、10) 244頁

² 本論文で取り上げたテキストの引用はすべて『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房 1995)によるもので、ルビは省略した。

³ 佐藤泰正編『別冊国文学 N0.6 宮沢賢治必携』(1980年春季号 学燈社) 133頁参照

が自分の都合のいいように勝手に解釈しただけだ、という逆転の発想から人間の錯覚を指摘し、さらに社会の通常認識までもを懐疑し批判する語り手の態度が明白に提示されている。

同じく〈狐が人をだます〉という認識に異議を唱えたものには「雪渡り」というテキストがある。次は「雪渡り」について検討してみよう。

2、アンチテーゼのもとに成り立つ交歓のユートピア——「雪渡り」

「雪渡り」は『愛国婦人』(大 10 (1921)、12, 大 11 (1922)、1) に発表され、題名上に「童話」と割注がついている。テキストは〔雑誌発表形〕と〔発表後手入形〕との二種類あるが、本論は〔発表後手入形〕を使用する。まず梗概を記しておこう。

一、四郎とかん子は野原に出かけ、「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子あ、嫁いほしい、ほしい」と森に向かって叫ぶと、小狐の紺三郎が森の中から出てきて、狐が人をだますというのは偽であり、「だまされたといふ人は大抵お酒に酔ったり、臆病でくるくるしたりした人」だと紺三郎はいい、二人を狐の幻燈会に誘う。それは十一歳以下という年齢制限のある会だ。二、約束の夜、四郎とかん子は鏡餅をお土産に幻燈会に出かける。狐小学校の生徒と一緒に幻燈を見たり歌い合ったりする。狐が作った黍団子を四郎とかん子が食べたので、狐たちは大喜び。

このテキストについての論及はテーマよりその表現法に関する評価が高く、それは諸家の一致するところである。例えば、小沢俊郎は「一篇の持つみずみずしいリズム、豊かなローカルカラー、浪漫的な凍み雪の原の叙景、雪を踏む軋みをキックキックトントンと表現した象徴の妙」⁴を高く評価する。西田良子⁵、続橋達雄⁶、寺田透⁷もほぼ同じ受け止め方をしている。もちろん表現の美しさを評価することはもつとものものであるが、筆者の関心はやはりテキスト中に現れた通常と異なった認識、及びそれに関わる登場人物の受け止め方にある。

まず次のくだりを見てみよう。

すると小狐紺三郎が笑って云ひました。「(前略) 私らは全体いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をさせられてゐたのです。」四郎はおどろいて尋ねました。「そいじゃきつねが人をだますなんて偽かしら。」紺三郎が熱心に云ひました。「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたといふ人は大抵お酒に酔ったり、臆病でくるくるしたりした人です。」

狐が人をだますというのは事実無根だという紺三郎の発言に対して、四郎が示す反応はまず驚きである。それはまず四郎もいままで人々が言い伝えてきたこと——狐が人をだます——を無邪気に信じていたことを示唆している。また、〈狐が人をだます〉という認識が子供にまで浸透していることから、

⁴ 小沢俊郎「狐考」(『四次元』昭 27、6) 1頁

⁵ 氏は『国文学解釈と教材の研究』(1989年12月号 学燈社) 106頁の「雪渡り」の項で、このテキストは「楽しく美しいファンタジーで、はずむようなリズム、清澄な情景、可愛らしい登場人物が読者の心を捉える」、教訓臭さはあるが、それらがあまり感じられないのは「全体をつつむ明るくユーモラスな雰囲気によるものであろう」と評している。

⁶ 氏は『宮沢賢治・童話の世界』(桜楓社 1973、6) 86頁で「一見して修身教科書の姿勢をのぞかせるが、作品全体の詩情に溶け込んで、ふしぎに教訓的な押し付けがましさを感じさせない」と述べている。

⁷ 氏は「宮沢賢治の童話の世界」(『文学』 岩波書店 1964、3) 18頁で、賢治童話の美しさの特質を論じるのに、まずこのテキストをあげ、「これらの道徳はこの話の美しさを支えるものではなく、その主題を構成するものでもない」、「清浄境における人獣交歓の透明な美しさはその話の生命で、モラリテなど問題とするには当たらないのである」と評している。

それが四郎らのいる人間世界の通常認識とされていることが分かる。まさにこの人間世界の通念に、小狐紺三郎が異議を唱え、いや、それを根底からひっくり返した。のみならず、その正反対の認識が人間世界にまで認められることを求めたのである。

では、この裏返しの認識を四郎とかん子がどう受け止めたのか。狐と子供らとの初対面のシーン——「キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出てきました。四郎は少しぎょっとしてかん子をうしろにかばって、しっかり足をふんばって叫びました」——から分かるように、四郎らは狐の現れに驚きとともに何らかの危機も感じた。しかし、その後の歌遊びのやりとりで、互いに信頼を得た。後の小狐の裏返しの発言にも最初は戸惑いを示しつつも、小狐の解釈で抵抗なくその正反対な認識を受け止めた。

このことがきっかけで、互いに信頼が得られ、友情が芽生えた。それで小狐が四郎らを自分たちの幻燈会に招待することになり、招待された四郎らとその幻燈会で小狐らと歌のやりとりをしたり、互いに愉快的な時間を過ごした。いわば、人間の子供らと小狐らとの間の愉快的な人獣交歓が実現したのである。ただし、その美しい人獣交歓の情景は四郎らが小狐の主張を受け止めたという前提があるからこそ、実現し得たことを指摘しておきたい。

また、小狐が主張した認識は人間世界の通常の認識と正反対のものであり、本人が意識するにせよ、しないにせよ、それを受け止めること自体はすでに通常認識に反することになるのである。これを、前述の四郎らが小狐の主張を受け止めることは人獣交歓が実現した前提となっている、ということと合わせて考えてみると、以下のような言い方に換えることができる。すなわち、人獣交歓の境地は、人間世界の通常認識と正反対である認識が容認された上でこそ、実現できるものである。ここでこの裏返しの認識が決定的な役割を担わされていると言えよう。

もちろんこの裏返しの認識の受け止め方に年齢制限という問題が関わっている。それは小狐らの幻燈会には誰でも出席できるわけではなく、十一歳以下の子供しか出席できないということである。それはおそらく幼い子供が固定した認識に束縛されず、抵抗なく新しい認識を受け入れやすいからだろう。ただし、これはあくまでも推測に過ぎず、そこに賢治文学における〈子供〉の役割や意味などの問題が絡められている。ここでは深入りせずに、その美しい人獣交歓の境地は年齢制限があるからこそ実現し得たということを指摘するに止めたい。

以上のように、人間と狐の人獣交歓のユートピアは人間世界と正反対の認識のもとに成り立ち、しかも、条件付きのものであると言えよう。

3、アンチテーゼを参考項とした訪問者——「茨海小学校」

このテキストの現存草稿の執筆は大正 12 (1923) 年と推測されている。その内容を簡単にまとめてみると、以下の通りになる。

茨海の野原へ火山弾の標本を採りに行った農学校教師の「私」が、小狐の仕掛けた「草わな」にかかって倒れ、狐の小学校に入る。狐先生に誘われて茨海小学校を参観することになる。その授業の内容に戸惑いを覚えつつ、見学を終える。帰る際に、火山弾を寄付する。

このテキストに関する研究はそれほど多くない。小沢俊郎の論及⁸はその中で代表的なものである。氏は「自由に空想を働かせて虚構の世界へ出入りする作品構成の巧みさ、狐小学校の教育内容がすべて人間世界から狐世界を見ていることの裏返しであることのおもしろさ、登場する狐たちの生きた描写などを自由に書いている」と評する。これは主にテキストの構成、表現上の特徴に重きを置いてい

⁸ 小沢俊郎「茨海小学校」(佐藤泰正編『別冊国文学 No.6 宮沢賢治必携』 1980年春季号 学燈社) 142頁

る論及だと言えよう。もちろん「視点転換により偏見を批判する」という点にも言及しているが、具体的な展開は見せていない。筆者は語り手に焦点を当て、視点転換の具体的な様相及びその意味についてさらに考察していきたい。

誰にとって校長にですよ。どこの学校？え、どこの学校って正直に云っちまひますとね、茨海狐小学校です。愕いてはいけません。実は茨海狐小学校をそのひるすぎすっきり参観して来たのです。そんなに変な顔をしなくてもいいのです。狐にだまされたのとはちがひます。

これは狐小学校の話に入る前の前置きの一部である。まず注目したいのは語り手「私」の語りかけ方である。語り手が語りかけた相手いわば聞き手は、語り手と同じ時代背景にいる不特定多数の人々と想定できよう。狐小学校の話に対して、語り手が聞き手の反応を想像して、「愕いてはいけません」、「そんなに変な顔をしなくてもいいのです」と対応する。つまり〈愕く〉〈変な顔をする〉という不信感を表わす反応は、当時の人々が狐小学校の話を知ると必ず示す一般的なものだと言える。なお、狐の話を実剣そうに話す人を「狐にだまされた」のだと判断するのも人々の普通の反応だと想像できる。そうでなければ、語り手が「ちがひます」と弁解する必要はない。要するに、上の引用文から、語り手のいる人間世界では狐は人間をだますものだという認識が、一般的であることは分かる。

このような一般常識は語り手によって完全に否定されてしまう。上の引用文からも分かるように、語り手は「狐にだまされたのとはちがひます」、と自己の経験談の真実性を最初から主張したのである。

それも理由があることである。「いかにも無邪気な子供らしい声が、呼んだり答へたり、勝手にひとり叫んだり、わあと笑ったり、その間には太い底力のある大人の声もまごって聞こえてきたのです。いかにも何か面白さうなのです。たまらなくなつて、私はそっちへ走りました。さるとりいばらにひっかけられたり、窪みにどんと足を踏みこんだりしながらも、一生けん命そっちへ走って行きました」、とあるように、「私」が愉快そうな異世界に強力に惹かれたため、その異界の闖入者になったのである。意外にもそこで大歓迎され、狐小学校の訪問者となった。つまり、そこに入るきっかけは狐の「草わな」にかかったことであるが、その「草わな」は単なる小狐たちの遊びの一種であり、人間を陥れるためのものではないと、狐側が釈明した通りに、語り手の「私」が信じている。したがって、「私」が狐にだまされたのではないと主張したわけである。

こうして語り手はまず〈狐が人をだます〉という人間世界の通常認識に異議を唱え、狐世界に対する興味深さを示した。とはいえ、狐世界の価値観にまで同感を覚えたわけではない。私は参観した修身の授業で聞いた話に「頭がぐらぐらしてきた」と困惑を示し、最後に狐小学校の教育方針について「正直のところわからないのです」と告白したのである。

では、語り手が狐の話に信用を寄せつつも、なかなか理解しかねる狐世界の不思議な価値観は何だったろう。以下はその具体的な内容を見ていくことにする。

「私」が参観したのは午後の授業である。第一学年には〈修身と護身〉で、そこで「最高の嘘は正直なり」について教えている。第二学年には〈理科〉で、鶏の肉や卵の成分について、教えている。第三学年には〈狩猟〉で、養鶏奨励の話をする。あげた例は「私」が自分の生徒から聞いた話とは全く正反対であった。

上の内容から、狐世界の価値観や視点が人間世界のそれとは正反対であることが分かる。ゆえに、人間世界の一員としての「私」が戸惑いを感じかねないのは当然のことであろう。

もう一つ留意しておきたいのは、狐世界が人間世界と遠く離れた、完全に無関係の世界ではなく、むしろ、緊密な関係を持っていることである。〈狐が人をだます〉という噂が人間世界に言い伝えられることも、狐世界の価値観が人間世界のそれの裏返しであることも、互いに緊密な関係があるからこ

そ成り立つのであろう。それは両世界の地理的な意味においてのみならず、両世界の価値観においてもそれが言えよう。もし全く関係がなければ、価値観が違ったものの、必ずしも相手のそれを裏返すものになっているとは限らない。万一そうだとすると、その確率は零に近いといっても過言でない。むしろ両世界は地理上においても、価値観上においても、紙一重の関係にあると言えよう。ある意味で裏返す行為自体が、人間世界と狐世界との間にコミュニケーションが存在することを意味している。要するに、人間世界と緊密な関係をもつからこそ、人間世界の価値観が狐世界の参照軸になり得るのである。もちろん参照方向は完全に逆で、すなわち人間世界の価値観の裏返しは狐世界の価値基準になるのである。

語り手の「私」は、このような裏返しの狐の世界に、戸惑いを感じつつも、「きっとあなたにも、大へん参考になります」と前書きで述べたように、理屈の裏付けなしで、直感によって、狐小学校のことが人間世界にとって相当な参考価値があると断言した。これは何を意味するだろう。おそらく狐小学校の話をするのは、単なる不思議なものでもって人々の注意を惹くためではないだろう。

同じくこの点に注目する論考では、中地文の『茨海小学校』——『たいへん参考になります』の意味するところ⁹がある。氏は「狐小学校の様子は実際に当時の読者が自分の学校生活あるいは教育の参考にし得るようなものだった」、また「すべてが人間中心にあるわけではないと知ることが『あなた』の参考になると」「結局二重の意味をもって」⁹いた、と指摘した。

確かに人間中心主義に反対する意味がこめられている。また、当時の学校、社会事情——例えば、卒業生が農業につかず、都会へと職業を求めため、農業が衰退するなど——から見れば、茨海小学校の事情は確かに一種の理想、少なくとも参考項として語られるのだと解釈するのも妥当であろう。しかし、これは語り手の「私」を作者レベルに還元する場合の話である。テキスト自体に限って見る場合は、どうなるだろう。語り手が「参考」になるという発言は、その当時の具体的な現実事情を踏まえるものだと判断しかねる。また、語り手が茨海小学校での奇妙な体験——人間社会と裏返しの世界の存在を知ること——にかぎらず、そこで体験したさまざまな裏返しの価値観自体までも参考になると言っていると考えられる。もちろんその裏返しの価値観をそのまま理想としたのではなく、文字通りに、参考項としているのである。ここで、語り手がとる視点は明らかに人間世界のそれではなく、むしろその正反対の視点であることが分かる。また、そこから語り手の人間世界への批判姿勢も明らかに読み取れる。

このように、小沢が指摘した「視点転換により偏見」への批判の姿勢は作家レベルにいかなくても、語り手のレベルで、すでに確認できるものである。また、語り手は単なる批判にとどまらず、異界で発見したアンチテーゼを、自分がいる人間世界のとるべきあり方の参考項として提示し、更なる建設的な姿勢を見せたのである。

以上の三篇は狐が登場した、いわゆる狐ものであり、狐をめぐる噂——狐が人間をだます——が話題の中心となっている。その噂に対して、狐なり、人間なりのさまざまな反応や認識や、さらにそこから展開されたドラマが描かれている。「とっこべとら子」「雪渡り」の場合はまだ事実の信憑性、いわば事実の真偽認識をめぐる論議であるが、「茨海小学校」の場合は事実の真偽認識より一歩進んで、生き方に関する価値観をめぐる議論に至り、しかも裏返しの価値観が参考項として提示するという積極的な姿勢も見せた。それぞれの重点は違うが、通常認識を裏返す、いわば価値観の顛倒の視点をとっていることは軌を一にしている。このように顛倒の視点をとることによって、現実世界への批判が盛り込まれていると言える。ただし、この批判には、醜い現実を改変しようという積極的な面を有する

⁹『国文学解釈と鑑賞 特集宮沢賢治詩と童話』第66巻8号（至文堂 2001,8）108頁～109頁

と同時に、単純に現実を裏返せばいいという短絡的な性格も内包していることは認めざるをえない。

二

前項で取り扱ったテキスト群では、顛倒の視点によって現実批判が展開されたが、この項で取り上げるいくつかのテキストの場合は、それと違って、面と向かっての現実批判が行われたと思われる。その批判のベクトルなど具体的な様相を明らかにすることを次の作業の主眼とする。

1、役人根性への風刺——「二人の役人」、「寓話 猫の事務所」

「二人の役人」は題名からも分かるように役人に関するものであり、「寓話 猫の事務所」は、付されている傍題「……ある小さな官衙に関する幻想……」が示したように、官僚機関に関するものである。両テキストに現れた批判の姿勢は明らかであるが、その具体的な様相と特徴をそれぞれ詳しく検討してみたい。

まず、「二人の役人」について。

このテキストも生前未発表のもので、現存草稿の執筆は大正 12（1923）年と推測されている。子供の「私」と友達の藤原慶次郎とが葎や栗を採りに野原に出かけたところ、二人の役人が東北長官一行を迎えるための準備をするところを見かけ、役人達のおかしな行動に噴きだす、という粗筋である。

このテキストは研究対象としてあまり取り上げられていないが、数少ない言及の中で、役人に対する軽い批判をユーモラスに表現したといった評価が中心になっている。例えば、天沢退二郎は「いかにも小心・臆病・おひとよしで愚かしく滑稽な“小役人”ぶりを、子どもの視点からユーモラスにとらえている」¹⁰と指摘している。また、続橋達雄は「気負いすぎた観念の過剰もなく、むしろ軽いユーモアとして」、「現代の民話を、地方官僚への諷刺というかたちで描こうとした」¹¹と評している。

両氏が評したように、テキスト全体をつつむ雰囲気はそれほど気難しいものではなく、むしろユーモラスな要素が多く含まれていることは確かである。しかし、テキスト全篇が滑稽な小役人に対する風刺にとどまるのかどうかは疑問である。

まず、二人の子供に光を当てよう。野原の入り口に立てられた「本日は東北長官一行の出遊につきこれより中には入るべからず。東北庁」という進入禁止令に対して、慶次郎は「少し怒って」、「構ふもんか、入らう、入らう」と禁止令を破っても構わないという強い態度を示している。ここから彼らの反抗精神がうかがえる。この反抗精神は、具体的な出来事、いわばある高官の出遊のため、野原進入禁止になるということに対して発したもののように見える。しかし、政府の禁止令を無視してまで行動すること自体は、すでに具体的、個別の物事に対する単なる不満の域を超えることを意味する。したがって、彼らの反抗的な行動は、意識的にせよ、無意識的にせよ、役人世界全体に対する批判になると言えよう。

子供らが反抗的な態度をとって野原に入ったが、発見されたら殺されるのではないかという恐怖感も隠さなかった。この恐怖感は彼らの単なる想像によるものであることは後で分かる。しかしそのように想像させる理由があるはずだと思う。それは普段の役人の態度や役所のやり方の酷さから由来したことは十分に考えられる。したがって、ここにも批判的な要素が滲み出ていると言える。

とはいえ、出てくる二人の役人は子供らの想像と違って、怖いよりも、むしろ、おかしい、同情さえしてしまうところがある人間だった。ゆえにこのような二人の役人に対して軽い風刺にとどまるこ

¹⁰ ちくま文庫『宮沢賢治全集 5』解説（筑摩書房 1986、3 第 1 刷、1998、1 第 12 刷）524 頁

¹¹ 続橋達雄「村童スケッチ覚え書」（『四次元』1961、7）14 頁

とは理解できる。しかし、問題の核心は批判の矢先が単に二人の役人個人にではなく、役人世界全体に向けたところにある。これは看過できない問題だと思う。

以上述べてきたように、批判のベクトルは役人にのみならず、役人世界全体に向かっている。そのなか、役人に対しては軽い風刺に終わり、そのような人間を作り出した役人世界に対しては厳しい批判が浴びせられているのである。

次は「寓話 猫の事務所」について。

このテキストの初出は『月曜』三月号（大正 15（1926）年 3 月、東京市芝区・恵風館）である。目次と本文題名上とに「寓話」とあり、「……ある小さな官衙に関する幻想……」のサブタイトルが付されている。梗概を記しておく。

猫の第六事務所で事務長黒猫、一番書記白猫、二番書記虎猫、三番書記三毛猫、四番書記竈猫がおもに猫の歴史と地理を調べる仕事をしている。土用に生まれた竈猫は皮が薄く寒さに弱いため、竈のなかに寝る癖がある。それで常に体が煤で汚れ、他の猫に嫌われ、いじめられている。しばらくは黒猫がかばっていたため無事だったが、結局、黒猫も他の猫の嘘話を信じ、竈猫の仕事を取り上げてしまう。可哀相な竈猫は途方にくれてしまい、泣くばかり。それを見た獅子は事務所の解散令を出す。

弱い物いじめ風の物語であるが、出来事の場所が官衙であるため、従来の研究¹²で自然に役人根性を批判するものだと想定するのも無理はないだろう。

テキストの中で、役人という仕事は若者の憧れであり、その人間は、選ばれたもの、いわばエリートである。そのエリート世界で、肩書きなど表は立派で鮮やかではあるが、内面の人間関係は汚いと言うしかない。竈猫へのいじめからはそれが言える。これを役人根性というなら、確かにこれへの批判要素が示唆されている。また、語り手の意見がはっきりしているため、そこからもしじめられた竈猫への同情や猫全体への批判が明白に読み取れる。

しかし筆者が目じりたいのは獅子の現れの意味である。獅子の登場は竈猫がいじめられて泣き続けた時だった。「獅子が大きなしつかりした声で云ひました。『お前たちは何をしてゐるか。そんなことで地理も歴史も要つたはなしでない。やめてしまへ。えい。解散を命ずる』と猫事務所の解散命令を出した。獅子がここで登場したのは竈猫への救済のためではないことに留意しておきたい。これは獅子のセリフから分かる。つまり、獅子の登場は竈猫への救済より、むしろ猫らの仕事自体への否定を宣告した。猫らが名誉に思われる仕事は実は無意味で、その事務所が解散すべきものであると獅子は察知し、そういう宣告を下ったが、この宣告はある種の社会批判につながると考えられる。つまり役人世界全体への批判、「ある小さな官衙に関する幻想」と傍題に書いてあるように官僚機関に対する批判とつながっているのである。

もう一つ注目したいのは弱者の竈猫が救済されたかどうかということである。猫事務所解散のおかげで竈猫がいじめられる運命から脱出できたかどうかは書かれてはいないが、おそらくそうだろうと想像はつく。だが、前述のように、獅子が解散を命じたのは、竈猫への同情によるのでもなければ、猫らのいじめぶりにあきれたためでもない。猫らの仕事自体が無意味であることを察したため解散命令を出したのである。したがって、解散命令は竈猫への一時的な救済になるが、いじめ根性が変わらない世の中であるかぎり、竈猫へのいじめも絶えないだろう。ゆえに、好都合に竈猫への一時的な救

¹² 例えば、小倉豊文はこのテキストを小動物の世界を借りて〈役人根性〉に対してユーモアたっぷりの風刺を行う寓話とする。さらにそれが一種の社会批判でありながらも、賢治が仏教の〈業〉の思想に基づいて、善悪正邪の片方のみをとって、是非判断するような態度をとっていないことを指摘している（『セロ弾きのゴーシュ』解説 角川文庫 1969、2）。

済が出来たが、完全な救済にはならなかったことは言える。また、一時的な救済も、他力によるものであることは明白である。

以上のように、「二人の役人」も「寓話 猫の事務所」も役人根性への批判姿勢が読み取れると同時に、批判のベクトルは役人機構全体へも差し向かっているのである。

2、詐取者の策略とその克服——「カイロ団長」、「オツベルと象」

「カイロ団長」と「オツベルと象」とでは、最初に愉快的な労働の場面が現れたが、その後何らかの原因で、労働者たちは労働に喜びを感じられなくなり、さらには苦痛さえも感じるようになった。以下は、喜びから苦痛に転ずるプロセスの中で何が起きたのかを、それぞれ見ていくことにする。

まず「カイロ団長」から見てみよう。

このテキストも生前未発表のものである。現存草稿の執筆は大正 10（1921）年あるいは大正 11（1922）年と推測されている。まずテキストの内容をまとめておく。

「あまがえる」たちが造園業を営み、労働を楽しむ毎日を送っている。ある日「とのさまがえる」が新しい酒屋を開店し、ウイスキーを飲ませる。そして、飲みすぎた「あまがえる」たちを借金返済という名目で束縛し、「カイロ団」という団体を作って、自ら団長となり、苛酷な労働を課する。「あまがえる」たちは、労働の喜びを失い、苦痛に喘ぐ一方である。その時、王様の命令が伝えられ、団長は自らの非を悟り、両方が和解して労働の楽しさが再び味わえる。

注目したいのは、「あまがえる」たちが酔っ払って寝てしまった時、また一匹目の「あまがえる」が家来になると約束した時、「とのさまがえる」が二回とも「にやりと笑っ」たことである。ここで「とのさまがえる」の狡猾さが露呈したと言える。したがって、「あまがえる」らがよっぽらいまくったことも自分の家来になることも、「とのさまがえる」の打算内に入っていることは十分に考えられる。だからといって、「とのさまがえる」が「あまがえる」らに嘘などをついて騙したわけではない。「あまがえる」らにウイスキーを飲ませる前にちゃんと値段を説明し、なお、途中で飲む杯数も確認したのである。また払えないから家来になるということも「あまがえる」らが自ら言い出したのである。物事は自然に「とのさまがえる」にとって好都合に運ばれており、彼の手による按配の痕跡が見当たらない。

では、なぜ「あまがえる」らがそうした羽目になったのか。まず「あまがえる」らの甘さが挙げられるだろう。この甘さはどこから来たのかというと、彼らのお人よしの性格と、普段の満足そうな愉快的な生活ぶりから想像できる彼らの險悪知らずのところ想起できる。だが、肝心なのは「あまがえる」の甘さを利用する「とのさまがえる」の作戦手段の巧妙なところだろう。ただし、「とのさまがえる」は「あまがえる」らの甘さのみを利用したのではない。借金返済不可能のため自分の家来になって、一所懸命に働いてくれるか、それとも警察に訴えるか、これが「とのさまがえる」がいつも口にするセリフであるが、そこに「あまがえる」らも認める借金返済の原理とそれをバックアップする社会体制と二つの要素が含まれている。「とのさまがえる」がまさにこの二つの要素をうまく利用したのである。

一旦「あまがえる」らが自分の家来になった途端、「とのさまがえる」は欲深い詐取者の面目をあらわに出した。苛酷な労働を課された「あまがえる」らは今まで感じた労働の喜びも水の泡のように消え、苦痛の日々を送っている。

その際、二回にわたって王様による新しい命令が下され、「あまがえる」らが苦痛から救い出されると同時に、「とのさまがえる」も改心し、それまでの過ちが許された。「寓話 猫の事務所」と同じ

く、事件の解決は王様という権威者の出現によってなされ、いわゆる他力的である。違うのはこの王様が「寓話 猫の事務所」のその断固した厳しい態度をとらずに、相手の原理を逆手にとり、痛みを体験させてから、みんなの調和をはかる点である。細部に多少の相違はあるが、絶対権威者によっての問題解決という他力的な性格には変わりがない。これは初期の「双子の星」からすでに見られる傾向である。

次は「オツベルと象」に検討を加えてみる。

このテキストは『月曜』創刊号（大正 15（1926）年 1 月、東京市芝区・恵風館）に発表された。文圃堂版全集第 3 巻（1934）以来、「オツベルと象」という誤植による表題が通用していたが、校本全集第 11 巻（1974）からは、上の表題に改められ、現在に至る。また、初出誌の結尾部分に脱字があり、草稿が現存しないため一字不明のままである。

粗筋は以下のようなものである。

ある日、森から白象がオツベルの作業場へやってきて、オツベルにだまされ、自分の財産にされる。オツベルは毎日白象をこき使っているが、与える食事はだんだん減っていく。白象は最初は嬉しそうに働いていたが、オツベルのあまりに酷い酷使に耐えられなくなり、仲間の助けを求める。仲間達が森から出てきて、物凄い勢いでオツベルを押しつぶし、白象を救出する。

これについての研究は数多くなされ、評価も多岐にわたっている。社会批判、風刺を含むテキストであるという点では、ほぼ諸家の意見¹³が一致している。ただし、その批判の捉え方で、〈社会主義的〉から〈宗教（仏教）的〉まで、大きなずれがあることも事実である。

農村問題や、労使関係及び詐欺者の欲深さに対する批判を重要視するのは妥当ではあるが、機械が象徴する近代文明への批判の視線も見落としてはならないのではないか。

冒頭部の描写に注目してみよう。

……稲扱機械（下線——筆者注、以下同）の六台も据ゑつけて、のんのんのんのんのんと、大そろしない音を立ててやつてゐる。（後略）

小屋はずるぶん頑丈で、学校ぐらゐもあるのだが、何せ新式稲扱機械が、六台もそろつてまわつてるから、のんのんのんふるふのだ。中にはいるとそのため、すつかり腹が空くほどだ。そしてじつさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらゐのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

上の引用で分かるように、ここで機械についての描写が相当な紙幅を占めている。また、オツベルは機械が象徴した近代文明に恵まれ、それをうまく利用したことも分かる。白象は、機械が象徴した近代文明に惹かれたため、オツベルの仕事場に残ったが、結局さんざん利用される対象になったのである。

次はオツベルがどのように最大限に近代文明を利用したのかを見てみよう。白象が最初に来た際、

¹³ 例えば、西田良子は「『オツベルと象』の再検討」（『日本児童文学』1974, 6）で、このテキストを、時代思潮を強く受けた社会批判的、階級闘争的作品だとする。境忠一は『評伝宮沢賢治』（桜楓社 1968, 4）220 頁の中で、「賢治の作品としては、社会主義的傾向のつよい作品で、農学校を止めて、羅須地人協会を作ろうとしていた頃の左傾ぶりを示している」という。また、鶴生美子は「『オツベルと象』について」（『賢治研究』1972, 4）では、農村社会の批判を主題とした仏教説話と捉え、また、それが賢治の信仰に基づく人間の生き方と、仏の持つ慈悲の深さに裏うちされている、などとしている。

オツベルは象に対する恐怖感を押さえつつ、「ならんだ機械のうしろの方で」「象を見」るのである。この場合、機械は単なる彼に財源をもたらす生産のためのものではなく、彼の命を保護するものにもなったのである。また、象の集団が襲来した際、オツベルがとった象と対抗する最後の手段はピストルを発射することである。ピストルも近代文明を象徴するものであろう。特にかつて鉄砲で門戸を開かされた歴史がある日本では、鉄で作った武器ほど近代文明を象徴するものはないだろう。

このような機械が象徴した近代文明は、結局、象の集団の襲撃によって敗れた。もちろん象たちがただ仲間を助けるために来たのであるが、結果的には彼らの集団の襲撃に、近代文明を象徴するものが敗れることになった。このように批判のベクトルはオツベルが利用した近代文明へも向かわされていると同時に、近代文明の脆さも暴かれるのである。

このテキストのなかで、近代文明の対立項、あるいはオツベル側の近代文明を破壊するものは、必ずしも原始的なものとは限らない。テキストの中に現れた象の集団の中に議長という役職があるように、山にある象の世界は単純な原始的な社会ではない。もしかして、もう一つの文明があることも想像させられる。そこは原始的な調和な生活を保ちつつ、近代的な要素を取り入れている世界ではないかと思われる。

同じ批判的なテキスト、前項で扱った「カイロ団長」と比較すると、以下の異同点が見られる。便宜のため、「カイロ団長」を前者と、「オツベルと象」を後者と呼ぶことにする。

まず、類似点から見てみよう。前者に出てくる「あまがえる」と後者に出てくる象とは、無邪気さ、お人よしさ、働き者というところに共通点が見られる。また、詐欺者の貪欲ぶりや、狡猾さは両者とも見られる。

しかし、相違点もかなり大きい。前者の詐欺者「とのさまがえる」の詐欺方法はある社会通用の原理に巧妙にのっとっているのに対して、後者の詐欺者オツベルの場合は何の理屈も加えず、ただ象の無邪気さとお人よしさを利用するだけである。さらに、前者の問題解決は絶対権威によるもので、他力的と言えるが、後者の場合は同類の助けによるもので、完全な自力とはいえないが、他力よりは一歩進み、自力の芽生えと言えよう。また、問題解決方法としては、前者の場合は温厚的で、最終的には悪人に改心させ、双方の調和に達成したのに対して、後者の場合は直接に悪人を押しつぶすという暴力行使で片がついたのである。この暴力的な傾向は詐欺者への批判姿勢が単なる冷やかな風刺の域を超えたことを意味する。つまり、詐欺者のような悪人に対しては、側面からの風刺だけでは物足りなく、真正面から向き合って積極的に戦うべきだというメッセージが含まれている。

以上取り上げた四つのテキストからは、現実世界に向けた批判の視線が明らかに読み取れる。そのなかに滑稽で理不尽な官僚世界に対する風刺及び批判が見られる一方、資本主義的経済制度に乗じたり、善意を利用したりして行われる際限のない仁義なき詐欺行為に対しては容赦のない攻撃を加える傾向を呈している。

以上、いくつかのテキストを取り上げ、批判のあり方を検討してきた。そのなかに反転する視線と直接的な視線という、二つの批判のパターンが存在することが確認できた。しかも、この二つの形式は必ずしも相反するものではなく、むしろ、相互に補い合い、批判の多様性を呈している。そのなかに、批判のベクトルは個人レベルに限定されることなく、そうした個人を作りだした環境、制度にまで向けられること、また、批判対象に暴力的な行為をとる傾向があることも確認できた。そこに批判の視線の深さと痛烈さが語られる一方、問題解決を急ぐじれったさも窺える。さらに、問題解決の方法としては、他力から自力への移行が見られる。

冒頭に引用した川端氏の見解によれば、批判と言うとき、必ず何かの良いと思われる参照物が存在することは想定できる。現実世界をそれに照らし、醜悪な、あるいは不完全な部分が露呈した際に、

不完全な世界に対する批判がはじまるのであろう。賢治テキストに現れる批判に則して言えば、その批判の背後に理想な世界像が想定されていることも考えられる。言い換えれば、批判は彼のユートピアの理想を参考軸にして展開されたのである。これはテキスト「蜘蛛となめくぢと狸」から「寓話 洞熊学校を卒業した三人」への改稿過程からは明らかに看取できる¹⁴。論証の詳細は別稿に譲るが、本論はこの指摘にとどまる。

また本論で考察したのは外部世界に向ける批判のあり方であるが、宮沢賢治、及び宮沢賢治テキストにおいては、内部世界に向ける批判のベクトルも看過できない。むしろ、それが賢治研究において避けては通れない核心的な部分である。紙幅の都合上、それについての考察は別の機会に譲る。

¹⁴ 詳細は拙稿「宮沢賢治初期文学におけるディストピア——「蜘蛛となめくぢと狸」を中心に——」（『比較社会文化』第10号 九州大学大学院比較社会文化学府 2001、10）を参考にさせていただきたい。